

メンターテキストを用いた作文指導法に関する研究

中 野 和 光

美作大学・美作大学短期大学部紀要（通巻第59号抜刷）

メンターテキストを用いた作文指導法に関する研究

A study on teaching writing using mentor texts

中 野 和 光

キーワード：メンターテキスト、作文指導法、ジャンル・アプローチ

1. はじめに

現代の米国の作文指導法を検討してみると、読解指導と結合して指導される場合が多いということに気づかされる。1970年代後半に、読解と作文は、いずれも、構成過程として実は類似の過程であるという理論が提案されたことが背景の一つに存在するように思われる¹⁾。もう一つは、ジャンル・アプローチと呼ばれる作文指導法が、1980年代頃から浸透し始めたことである。ジャンル・アプローチは、現実生活、日々のテキストを、手続き文、報告文、議論文、描写文、説明文、のように分類したジャンルごとに、モデル文を示す―共同で討議する―独立して書く、という段階を踏む作文指導法である²⁾。読むことと書くことの結合のためには、このジャンル・アプローチに見られるように、モデル文の提示が必要である。モデル文は、今日の作文指導では、メンターテキストと呼ばれることが多い。本稿では、このメンターテキストを用いた作文指導法について検討してみたい。メンターテキストは、作文指導のためのモデル文として使える、新聞や雑誌の記事、インターネット上の文章、広告の文章、本、あるいは、児童生徒の作文、教師自身の書いた作文などから選ばれた文章を指す。書物として市販されているものもある。

2. メンターテキストを用いた作文指導法の類型

メンターテキストを用いた作文指導法の類型を検討

してみたい。

(1) 文章の特徴を教えて、その特徴をよく理解して
作文を書く指導法

カルハム Ruth Culham らは、メンターテキストを用いた作文指導法を次のように説明している。

作文には、次の特徴がある。①考え（その文章の内容）、②組織（その文章の内的構造）、③声（書き手の個人的刻印）、④流暢さ、⑤慣習（綴り字、大文字、句読点、文節、文法、慣用法の正しさ）。カルハムらは、これらの特徴について説明し、これらの特徴を備えた書物を紹介している。また、メンターテキストは紹介した書物だけではなく、あらゆる所にあると述べている³⁾。

カルハムらの、特徴を教えて、作文を書かせる指導法を幼稚園と小学校の低学年に適用したウォルサー Maria P. Walther らの指導計画は、次のようなものである。

9月 作文場面の設定

10月 物語の開拓

11月と12月 物語の要素への焦点化

1月 現実世界のジャンルの発見

2月 伝記の理解の形成

3月 詩を書く

4月と5月 ノンフィクションを書く⁴⁾

ウォルサーらによれば、読解のストラテジーにおけ

る私たちが見るのと同じやり方で、私たちはこれらの文章の特徴を見る。

文章の特徴だけが、作文指導のカリキュラムではない。それ以外に、文法の学習がある。さらに、ジャンル意識を育てなければならない。

指導の方法については、ウォルサーらは、次のように述べている。

読解と作文のバランスの取れた指導の核心には、児童文学がある。児童の前で児童文学を音読し、書き手の視点でそれを討論することは、児童の作文の可能性の範囲を拡大する。絵本がこの場合、理想的なメンターテキストになる。

その次に重要なのは、教師がモデル作文を書いて見せることである。このときモデル化された作文は、読解のときの音読とそれを討論することと同じ役割を果たす。書き手に何が期待されているかを明確にする。

その次に、児童と教師が一緒になって、はじめ—中—終わり、の構造をもった物語を書き、モデル作文で示したことを強化する。(共同作文)

次に、教師が、文字や単語、語句、を書くのを手助けする児童を選んで、児童たちとともに、作文の目的を決め、考えを出し合って、文章を書く。再読し、修正し、編集する。書いた作文をもう一度再考する。学習したことを要約し、反省する。教室図書館に置いて経験を拡大する。(相互作文)

つぎに、書く責任を徐々に児童に委譲する。教師の指導の下に、個々の児童又はペアまたは三人または小集団で書く。教師は巡回し、相談に乗る。(導かれた実践)

最後に、児童たちはそれぞれ自分で作文を書く。(独立した作文)

教師は、毎日、15～20分、日誌を書かせて、この独立した作文の機会を準備する⁵⁾。

(2) 文章の技巧を教える作文指導法

エーマン Susan Ehmann らは、文章の技巧を教えるためにメンターテキストを使っている。文章の技巧とは、書き手が読み手の注意を引くために用いる目

的で意味のある技巧のことである。小学校の児童にとって適切と考えられる27の技巧を上げ、小学校を卒業するまでにこれらの技巧を自分の作文に生かす試みの十分な機会を与えられるべきであると述べている。そして、これらの技巧を教えるためにメンターテキストを発見し、メンターテキストライブラリーを作り、年齢に適切な技巧学習を位置づけることを提案している。

27の技巧は、次のとおりである。

頭韻、規則破り、繰り返しの終末、累積的テキスト、記述言語、効果的な終末、フラッシュバック、誇張法、興味を引く構成、導入部分、列挙、比喩、擬音、擬人化、視点、印刷文字(太字、イタリック、フォントの変更)、印刷レイアウト、句読点、繰り返し、押韻、行ったり来たり、順序づけ、直喩、テキストの特徴(目次、索引、図表、キャプション、写真、見出し)、動詞と動詞形態、声、しゃれ

技巧学習の授業例

- 1 メンターテキストを読んで、書き手にとって新しい技巧に気づき、それに名前をつける
- 2 その技巧について深い理解をする
- 3 自分の作文に試してみる
- 4 発表会を持って祝福する⁶⁾

(3) 現実世界の作文を指導するためのモデルとしてのメンターテキストの使用

ギャラハー Kelly Gallagher は、作文は現実世界の作文でなければならない、もし、そうでなければ、生徒は、作文は、学校の中だけの活動とってしまう、と述べている。現実世界の作文を指導するために、ギャラハーは、二つの前提をあげている。ひとつは、現実世界のテキストを生徒に紹介することである。もうひとつは、生徒に、広範囲の教師と現実世界のモデル文を必要とする。

ギャラハーによれば、現実世界の作文は、さまざまな目的を持っている、それらは、次のように順序付けられる。

- 1 表現と解釈—自分自身の生活と経験を書く
- 2 教示と説明—要点と目的を書く。驚かせるやり方で情報を提示する。
- 3 評価と判断—価値に焦点化する。
- 4 探究と開拓—問いと問題を持って書く。
- 5 分析と解釈—現象を分析し解釈する。
- 6 立場をとる／解決策を提案する。

たとえば、バレーボールひとつをとっても、

- 1 どうしてバレーボールが好きになったのか
- 2 ゲームの規則を説明する
- 3 私の経験した最悪のゲーム
- 4 バレーボールの歴史は何か
- 5 なぜ、サバンナハイスクールとの試合で負けたのか
- 6 レフリーはもっと訓練する必要がある

と、6つの目的で作文を書くことが出来る。

今日の新聞の中にも、この6つの目的で書かれた記事を見つけることが出来る。

実際の指導においては、現実世界のモデル文(メンターテキスト)を見せ、教師は、6つの目的で、この順にしたがって、モデル文を書いて見せ、その上で、生徒にこの6つの目的で、この順序で書かせている⁷⁾。

(4) ジャンル作文を指導するためのメンターテキストの利用

フィクションのジャンルの作文指導例をあげてみよう。

ベンダー Jenny M. Bender は、本当らしいフィクションのジャンルの指導の方法を次のように述べている。

最初に、児童に個人的物語を書かせる。物語のジャンルの良い作文の特徴を使って、それらの作文を評価する。次に、メンターテキストとして使う本を決める。授業は、次のような段階で計画される。

第1段階 ジャンルの展望の形成

教師は、メンターテキストを音読する。そして、本当らしいフィクションのジャンルについて討論する。

学級全体または2人1組みで、文章の構造や技巧など気づいたことはなんでも話し、また、図解する。教師と児童と一緒に本当らしいフィクションを書いてみる。

第2段階 トピックをつくり、計画する

児童は、登場人物、登場人物の抱える問題、その解決策を考え、物語を計画する。

第3段階 草稿を書き、修正する

第4段階 編集し、発表し、祝福する⁸⁾

(5) 短時間に意味のある深い作文を書く指導のためのメンターテキストの利用

ホランド Robin W. Holland は、1975年に教職についた。そのころの作文は、現実作文と創作作文だった。創作作文の課題は、次のようなものだった。

「火星人があなたの教室に降り立った。そして、あなたたちに宇宙船に乗っていっしょに火星に行こうと言った。あなたの旅について書きなさい。」

「あなたは突然見えなくなった。あなたは どうしますか？」

生徒たちは、一部の生徒を除いて、貧弱な作文しか書けなかった。

ホランドは、このことから、短時間に意味のある深い作文を指導するために、次のような、メンターテキストを用いた指導法を考えるようになった。

1 メンターテキストを読む

メンターテキストは、絵本、小説、随筆、詩、ウェブサイト、商業文、生徒作文、といったものを含む。

2 生徒は、ノートに書く

教師の指示のもとに、予備作文をする。

3 掘り下げた意味のある作文を実際を書く

作文のトピックは、次のようなものである。

「私たちの名前の力と痛み」—ジャンルは、物語、詩、随筆、報告

「世界の人々」—ジャンルは、説明文、又は、説得文⁹⁾

(6) オープン・ソースとしてのメンターテキストを用いた作文指導法

フレッチャー Ralph Fletcher は、オープン・ソースとしてのメンターテキストを用いた作文指導法を提案している。オープン・ソースとは、コンピューター・プログラムでマイクロソフトのウィンドウがクローズド・ソースであるのに対し、Linux や Android が、オープン・ソースであると言われるのと同じ意味で使っている。

フレッチャーによれば、生徒たちは、メンターテキストを読むとき、通常、主題よりもその文章の技巧や美学に注意を払う。しかし、メンターテキストを自分の道具として読むときは、そのような読み方はしない。内容に関わる問いを持って読むはずである。それで良いのである。メンターテキストを読ませるとき、このストラテジー、この技巧といったことに生徒たちの注意を払わせるのではなく、これらのテキストを見て、自分自身の言葉でその中に入る様にすべきである。生徒はそのほうがより自立的になる。

具体的には、メンターテキストの文章の後に、書き手の意図、技巧、工夫した表現、物語の構造、等を書いた書き手のノートをつけて、生徒たちに、1回は楽しみで読み、2回目は、技巧に注意して読み、次に鉛筆でテキストに印をつけて読み、気に入った部分をノートに写し、小集団または学級全体で討論し、そして、自分自身の作文を書く¹⁰⁾。

以上の作文指導法を検討してみると、(1) は、メンターテキストを児童の前で、教師が音読→教師がモデル作文を書く→児童と教師が一緒になって書く(共同作文)→相互作文→導かれた実践→独立した作文、という順序で、指導している。教師自身がモデル文を書くこと、徐々に児童に責任を委譲するように指導していることが特徴的である。

(2) は、メンターテキストを文章の技巧を教えるために使っていることが特徴的である。

(3) は、現実世界の作文の目的6つを順序付け、現実世界のモデル文(メンターテキスト)を見せ、教師

がこの順序に従ってモデル文を書き、その上で、生徒にこの順序に従って書かせている。

(4) は、文字通り、ジャンル・アプローチの実践である。

(5) は、短時間に、意味のある作文を書くようにするためにメンターテキストを使っている。

(6) は、技巧やストラテジーを教えるためにメンターテキストを使うことに反対している。メンターテキストに、書き手のノートをつけて、生徒に自由に読ませ、ノートをとらせ、討論させた上で、書かせている。

これらの作文指導法に共通しているのは、メンターテキストを使用していること、徐々に責任を委譲して、最後は、児童生徒が独立して書くことは共通している。ジャンルを意識していることも共通している。文章の特徴、技巧、現実世界の作文の目的、短時間に意味のある文章を書くこと、自由に読み、ノートをとって自律的に書くこと、というように、何を強調しているかは指導法によって異なる。教師がモデル文を書く指導法もあるし、書かない指導法もある。

3. メンターテキスト作成の試み

わが国においては、かつて文範と言われる模範文集があった。作文指導は、この文範を使って指導することが明治時代までは、主流であった。このような模範文を使って作文指導することは次第に廃れていった。その背景には、そのような模範文を用いることは、児童生徒の自由な発想による作文を拘束するという意識があったのではないと思われる。今日でも、文範と言われる書物はあることはある¹¹⁾が、実際の作文指導に用いられることは多くない。

現代の米国の作文指導は、逆に、メンターテキストを用いた徐々に児童生徒に責任を委譲する作文指導法が多く行われている。米国でも、作文指導法の類型(6)が述べているように、メンターテキストが技巧やストラテジーを詰め込むことに使われることを危惧する意見もある。類型(3)の著者も、エッセイは、はじめ一なか一おわりがあるということを教えれば良いので、5文節からなるエッセイ、というふうにエッセイの型を決めて書くことに反対している¹²⁾。メンターテ

キストは、文章の特徴、技巧、目的、ジャンル、を教えるために、現実世界の文章のなかから選ばれるので、模範文となるような名文とは限らない。その意味では、文範とは必ずしも同じではない。

メンターテキストを使用した作文指導法の背景には、ジャンル・アプローチがあると述べたが、わが国でも、21世紀に入って、明確なジャンルの下で作文を指導する必要性が主張され始めている¹³⁾。今後は、明確なジャンル意識の下でモデル文を示したり、教師自身がモデル文を書いたり、児童とともに書き、その上で、児童に独立して書かせるという実践が増えることが予想される。

この意味で、学生たち¹⁴⁾と、小学校の児童の作文指導のためのメンターテキストを作成することを試みた。

メンターテキストの材料は、図書館にある絵本、随筆、インターネット、新聞、雑誌等の文章、あるいは、自分で作成したモデル文である。

ジャンルは、物語文、説得文、描写文、手続き文、である。

学生たちが自分で書いたモデル文を上げてみる。

[説得文]

給食がすきになるために

きらいなものの1つや2つくらい、だれにだってあるものなのに、どうして先生はぼく達に給食を完食させようとするのだろう。

この前もそうだった。先生は、牛乳が苦手なタケル君に「これは、カルピスのいとこだぞ。」と言って、無理に牛乳を飲ませていた。タケル君はカルピスも飲んだことがないのに…。サナエさんは、プチトマトがきらいで、残しているところを先生に見られ、「食べ終えるまで見ておくれ。さくらんぼだと思って食べてみなさい。」と言われ、泣きそうになりながら食べていた。この前テレビで言っていたけれど、これはちょっとした「パワハラ」だ。

先生は「給食は栄養を考えて作られているんだから残さず食べなさい。」とか「世界には、食べたくて

も食べられない人がたくさんいるんだぞ。」と言うけれど、ぼく達から言わせてもらえば、「何も、きらいなもので栄養を取らなくてもいいんじゃないか。」「残ったものを、食べられない人達に分けてあげればいいんじゃないか。」と思っている。それに、ぼくのお父さんはキュウリが苦手だし、お母さんはシイタケがきらいだ。ぼくは、2人がきらいなものを食べている姿を見たことがない。「どうして、きらいなものは食べないの?」と聞くと、「食べたら気持ちが悪くなるからだよ。」とお父さんは言っていた。大人にだってきらいなものがあって、食べたら気持ち悪くなるのだから、子どもだけが無理してきらいなものを食べるのは不公平だと思う。

もし、みんなでおしゃべりしたり、わらったりしながら楽しく食べることができるのなら、ぼくは給食がすきになったかもしれないけれど、今の給食には、それが欠けているので、給食がちっともつまらないものになってしまった。

だから、「先生、お願いします!!ぼく達が給食がすきになるためにも、給食の時に、ぼく達にきらいなものを残させてください。」

携帯電話を持たせてください

この理由として、1つ目は、アクセス制限やフィルタリングなどの機能がつけられるということです。携帯電話を持たせたくない親の理由の一つとして、携帯電話を持たせることによって、子どもにとって有害な情報が入ってしまうという心配があると思います。しかし、これらの機能を付けておけば、子どもにとって有害な情報が入ることは少なくなります。

2つ目の理由として、防犯ブザーなどの、いざという時に使える機能があることです。このようなときは、大抵自分で大声を出すということは難しくなります。そのため、携帯電話を持っていれば、簡単に周りに状況を伝えることができるし、自分の身を守ることでもあります。

最後の理由は、親との連絡をとる手段ができるということです。2つ目の理由と同様に、何か起こった時

など、すぐに親に連絡をとることができます。もちろん、親からも連絡ができるので、帰りが遅いなど、心配な時は、自分の子どもに簡単に連絡を取ることができます。

このように、使い方次第で、自分の安全を守るために携帯電話を使用することができます。親が子どもに携帯電話を持たせるときに、事前に約束事を決めておくなどしておけば、携帯電話を持たせることに、デメリットは少なくなってきます。

休み時間を長くしてほしい

休み時間を長くしてほしいです。そう思っている理由は、大きく分けて2つあります。

1つ目の理由は、最近の子どもは運動が苦手な子どもが多いからです。僕も僕の友達もテレビゲームをするのが好きなので、外では遊びません。だから、運動が苦手です。なので、休み時間が長くなって外で遊べば、少しは運動が好きになります。そして、体育の時間が好きになると思います。

2つ目の理由は、休み時間が長くなれば、先生にわからない問題を聞きにいきます。授業でわかっている子とそうではない子がいると思います。わかっている子はべつに苦労しませんが、わかっていない子は、苦労します。わかっていないと、次の授業についていきません。でも、今の休み時間の長さでは短くて聞きに行くことができません。だから、長くなれば聞きにいきます。

休み時間を長くすれば、運動がみんな好きになり、運動能力も底上げされて全体のレベルが上がります。それと同時に、勉強できない子どもが減り、学力も上がります。

こんなおいしい話はないと思うので、ぜひ休み時間を長くしてほしいと思います。

[描写文]

白く輝く前浜

どこまでも遠く、空の青さにも負けずにゆっくりと時が流れていく。時の流れにまかせながら静かに、静

かに風に揺られるがまま……

真っ青に晴れわたる空と今にもくつつきそうで終りがなく続いている。空に浮かぶ雲さえもまるで海の上に浮かんでいるかのよう。魚が飛び跳ね、水面には波紋が静かに広がっては消えてゆく。

静かに流れる波が何かに当たり流れをかえた。ところどころに見える大小様々な突起物。白、青、ピンク、緑。どっしりとかまえながらも魚に優しく静かに生きている。波がさーっと引き少しだけ姿を現してくる。この島をかたどるサンゴ礁と同じ息をしている。

風に揺られる大きく広い海をじっくり眺める白く優しい砂浜。ゆっくり踏み入れる足を優しく包み、その跡をしっかりと刻ませてくれる。自然や人工物の跡をそのまま受け入れ、様々な形に変えていく。ゆっくり押し寄せてきた波にその跡を消されてもおお、動かず、じっくり海を眺め続ける。

時にまかせたその水を手ですくうと、魔法のようにその手にいないようだ。しかし、魔法はすぐ解けはじめ、手だけが残る。足を踏み入れてみても、地上を歩いているかのように、しっかりと地を踏みしめる私の足が見えてくる。その足の周りにはカラフルな小さな魚たち。小さくとも、とても優雅に泳ぎつづけるその魚は、空からもしっかりと確認できる。止まることなく真っ白に輝く砂浜の近くで、優雅に泳ぎつづける。

そらのかんさつ

そらは、ひろいです。

あおくはれているときがあったり、しろいくもがあったり、はいいろのくもがあったりします。くもは、いろいろなかたちがあります。まあるいくもや、ながぼそいくも、おおきいのやちいさいのがあります。はいいろのくもからは、あめがふります。あめがつよくなるとかみなりがなり、いなづまがはします。

ふゆになるとゆきがふります。

うみのかんさつ

うみはとてもひろいです。

はてしなくすいへいせんがつづいています。

たくさんのふねがいききしています。

うみはとおくでみるとあおいけど、ちかくでみるとうめいです。

たいうにてらされてすいめんがぎらぎらとひかっています。

うみにはわかめがういています。ちいさなさかながおよいでいます。

ホタルのかんさつ

ホタルはきれいなかわにいます。かみきりむしのようなかんだをしています。

あたまのすこしたらへんがあかいいろをしています。ほかは、まっくろです。

しょっかくもあります。よるになるとおしりのあたりがきみどりいろにひかります。

はねがあるのでとびます。ふわふわとびます。とてもきれいです。

[手続き文]

盗塁のコツ

僕は、大学に入ってから一度も盗塁でアウトになったことがない。

盗塁は足が速い人が有利と思われがちである。しかし、僕は50メートル走が速い訳ではない。でも僕は盗塁には自信がある。

僕が塁に出て盗塁をしようとする時、何を見て盗塁しているかというと、「ピッチャーの足である」右ピッチャーなら左足をみている。

なぜかというと、踏み出す足だからである。投げる時にピッチャーは必ずキャッチャーに踏み出す。その足のちょっとした動きや動いた瞬間をスタートの合図としている。僕は、動体視力が優れている（多分）から少しの動きをとらえてスタートしているのだ。塁間は約27.4メートルという長さであり足の速さは関係ない。その中で足の遅さを補うためにピッチャーを観察し癖を見抜きスタートを少しでも早くしようとする姿勢が二期連続で盗塁王をとった所以である。

4. おわりに

現代米国のメンターテキストを用いた作文指導法を検討し、学生たちとメンターテキストを作成してみた。このメンターテキストをどのように使用するかは、実践の文脈による。多様な実践の文脈の中で、メンターテキストを用いた作文指導法を実証し、開発することが今後の研究の課題である。

引用文献

- (1) 中野和光「現代米国読解指導法に関する一考察—ピアソン P. David Pearson を中心として—」美作大学・美作大学短期大学部紀要、第46号・第58号、2013年、pp. 47-54 参照
- (2) 「ジャンル・アプローチを基礎とした授業方法の実証的研究」文部科学省科学研究補助金（基盤研究(C)(1)）研究成果報告書（研究代表者 中野和光）2011年3月 参照
- (3) Ruth Cuham et al., Using Mentor Texts to Teach Writing with the Traits: Middle School, Scholastic, 2010.
- (4) Marie P. Walther and Katherine A. Phillips, Month- by- Month- Trait-Based Writing Instruction, Scholastic, 2009.
- (5) Ibid.
- (6) Susan Ehmann and Kellegan Gayer, I Can Write Like That!: A Guide to Mentor Text and Craft Studies for Writers Workshop, K-6, International Reading Association, 2009.
- (7) Kelly Gallagher, Write Like This, Stenhouse, 2011.
- (8) Jenny M. Bender, Teaching Young Writers to Craft Realistic Fiction: Ready-to-Use Lessons, Mentor Texts & Ongoing Assessment, Grade K-3, Scholastic, 2012.
- (9) Robin W. Holland, Deeper Writing, Corwin Press, 2013.
- (10) Ralph Fletcher, Mentor Author, Mentor Texts, Heinemann, 2011.

- (11) たとえば、林大他著『現代作文講座別巻 現代文範集』明治書院 1977年
- (12) Kelly Gallagher, op. cited.
- (13) 大内善一「明確な作文ジャンルの下で＜作文技術＞の指導を怠ってきた」教育科学国語教育 No. 657 2005年6月号 pp.11-13
難波博孝「ジャンル意識を育てる記述力を伸ばす」教育科学国語教育 No. 700 2008年11月号 pp.9-12
- (14) 児童学科3年生池下咲季、永見祥恵、伊志嶺紗央理、植月彩乃、津田裕子、坪内光輝、中島信、饒平名知希
本研究に協力してくれた学生たちに感謝の意を表します。